

福崎君の 若葉の蔭から

福崎かずたろう

第5回 ~~新車を買う~~

今月は、「新車を買う」の予定でしたが、番組を変更いたしまして、「当て逃げについて考える、このバックヤロー！」をお送りいたします。つきましては、皆様、黒ネクタイもしくは黒系のお服をご着用の上、心静かにお読みくださいますよう、お願いいたします。バックミュージックには、チャイコフスキーの「悲愴」などがよろしいかと……。

天〇陛下の安定した状態のおかげで（これはヤバかったりして）、火星大接近のニュースが、ほとんど無視された形になった9月22日木曜日。いつものように守口東高校へ通勤うために、愛車エス君に乗り込んだのだった。その日はバカガキどものために、前日の夜、作っておいた「太陽放射」のプリントを刷らなあかん、と思い20分ほど早めに家を出たのだ。ところがエス君が空腹を訴えるものだから、私は仕方無しに、家からまっすぐに南に向かい、中環にぶつかったところにある給油所に立ち寄った。とんだロスタイムで、私は軽く怒りながらも、旨そうにガソリンを飲むエス君の横腹を撫でてやるのだった。うううかわいいエス君！！

いつものように中環は吹田インターで渋滞する。この半年のデータ通り、約30分で、吹田インターを抜けそうだ。さて、インターも終わりに近づいたあたり、道路は3車線。50メートル先で、中環は左のレーンを見捨て2車線になる。左のレーンの車は、中環に入ろうとして真ん中のレーンに割り込む、つまりそこがネックとなるのだ。私は真ん中のレーンにいたが、ここは混むのが

判っているので、出足の遅いトレーラーの前があいた瞬間、右側レーンへさっと入り込んだ。この「入り込む」と「割り込む」のは紙一重であるが、私は、少なくとも入り込んだ後続車が不快にならないような距離の時にしか、入り込まないことにしている。別に真ん中のレーンでも、数分しか時間的には変わらないのことだし。まあ、しかし、そんなわけで、その日は右側のレーンに入れて満足であった。ほどなく、左と真ん中のレーンは流れが滞ってストップ。私のいる右側レーンのみが流れた。えっへっへえ～、はやいはやい。

ドツツン！！ 大きな石に乗り上げたような衝撃！ ハンドルを取られ、車が少し右にふれた。瞬間、あてられた！と思った。あーああ、買って一ヶ月半で、事故とは・・・。バックミラーで後ろを見た。真ん中のレーンから車が一台、飛び出した格好になっていた。私の視界には全然入ってなかったから、私が走り去ったあと、入り込もうとしたが、タイミングを誤ってぶつかってしまった、ってところだろう。しかしどのくらいへこんだのだろう、わずかであればいいが。交差点の手前の右側レーンのぎりぎり端まで車を寄せて留めた。ぶつかってきた車もおとなしくエス君の後ろに留まった。私はエス君の後ろに回った。左のドアから後ろのフェンダー・タイヤハウスまで、きれいにへこんでいた。プロテクトモールというプラスチックで出来ているドア下の防具は見事に千切れていた。ショックだった。「あ～ああ」私は声に出して言いつつ、素直についてきたぶつけ車のところへ向かった。

ぶつけ車は、旧式のクレスタかマークⅡだった。エス君とぶつかったと思われる右のバンパー以外にもいたるところ傷だらけであった。

中に乗っていたぶつけ男は、小太りで少しヤンキー風、ちょっと見は老けて見えるが、表情とか皮膚の張りを見ると、もしかしたら10代では、という、に一ちゃんだった。ぶつけに一ちゃんは、座席に座ったまま、罰の悪そうな顔をして、馴れた手付きでもってさっと免許証をこちらに差し出した。『しっかり見ておけば良かった』 5分あとには私はこう思ったものだ。

「まあ、警察呼びましょう。」 軽いパニックで冷静さを失っていた私は、免許証を見ずにこう言った。

「警察ですか。」 に一ちゃん表情が曇った。

「あたりまえでしょう、警察呼んで事故証明してもらわないと。」

「・・・」

「そんじゃ、まあ、そこのローソンの駐車場にでも留めましょうか。」
いつまでも右側のレーンに留めていては、他車の迷惑になる、というような考
えから私は言った。『そんな必要はなかった。三角板でも出しとけば良かった
んだ』 3分のちに私は思ったものだ。

「はあ。」 に一ちゃんは元気なく答えた。

信号は赤だった。ちょうど信号で止まっている車の先頭になっていた私は、
少し前へ出て、止まっている車の前を横切り、道路の左側のローソンの駐車場
に入った。ぶつけ車も、のそのそと出てきた。

と、そのとき、信号が青に変わった。止まっていた関係の無い車達は一斉に
スタート、ぶつけ車の進路は他の車達に遮られた。私は道路の左側、ぶつけ車
は右側に、距離にして10メートル。ぶつけ車は少し躊躇したような感じでそ
の場に止まっていたが、やがて右にハンドルをきり、あっというまにUターン、
池田方面へ消えてしまった。

私はとっさにプレートを見たが、残念ながら数字の部分しか確認できなかつ
た。そして、その瞬間、私は後々沸き起こってくる怒りや憎しみといったもの
よりも、「信じられない」という不信感と自責の念で頭の中がむせかえった。
それまで、事故を起こしたことに関しては憤りを感じてはいたが、それこそ
「罪を憎んでなんとやら」で、ぶつけ男自身の人格は悪ではない、などと、変
に信用していたフシがあったのだ。だから、ぶつけ車がUターンしてからでも、
もう一度Uターンして戻って来るのではないか、などとも、多少考えたくらい
だった。だが当然戻っては来なかった。

The image shows two lines of handwritten Japanese text in black ink on a light background. The first line reads 'ばっかやろー！' (Baka yarō!) and the second line reads 'それでも人間かー' (Soredemo ningen ka~). The handwriting is expressive and somewhat messy, with long horizontal strokes and a trailing dash at the end of the second line.

う～ん、やはり怒りの表現は肉筆に限るなあ。これがワープロだと

ばっかやるー！
それでも人間か

というふうにな物のチラシみたいやし

ばっかやるー！
それでも人間か～

と、毛筆でやってしまうと、怒りの中にも何かミヤビなオチツキがあっていけない。

などと、冷静に文章の感情表現における書体学講座を開いているように見せつつ、3回も怒鳴ってしまった。しかし私は怒っているのだ！もう一回行くぞ！

ばっかやるー！
それでも人間かー！

「それでも人間だよおんん」などといいながら笑ってやがるのかな。あいつは、今ごろ。 ころー！ 5・6年ほど前の型のクレストカマークⅡで、ナンバーが【・104】か【・108】のぶつけ男、おまえ、これ読んでたら出てこおい！

事故と裏切りのダブルショックで、私は放心した。そして大いに怒ったあとに、今度は自分の不手際について大いに恥じた。そして5秒後に、とにかくケイサツケイサツと、電話に向かった。

すぐ向かう、と言ったわりには、お巡りさんはなかなか来なかった。私は勤務先へ遅れるむね連絡して、道路沿いでひたすらパトカーを待った。所在なく道路を眺める私の頭の中は、30パーセントのぶつけ男への怒りと70パーセントの自分に対する怒りが渦巻いていた。

はたして、ばかみたいに（読者の皆さんもそう思うでしょ）相手を信用して、逃げられた私は、善人なのだろうか。常識のないアマちゃんなのか。単純にばかなのか。あいつはいったいどんな奴だったのか、魔が差して逃げてしまっただけなのか、それとも海千山千の大悪党だったのか。

こういったことを、人生23年目にして、はじめてじっくり考えることが出来たようだ。いかに今までの私がアマちゃん、周りの人間が優しく正直で善人であったか。わかったような気もする。

パトカーがきたのは、30分もたってからであった。これが大事故だったらどうなっていたら、さぞや自分はおろおろしてパトカーを待ったことだろうと、このころになると少し冷静にいろいろ考えるようになった。パトカーから降りてきたお巡りさんは、人のよさそうなおじさんと、フレッシュマンといった感じの若いに一ちゃんだった。一応事情を話して、今後の手続きについて話を聞いた。とにかく急いで吹田署へ行けということだった。そして二人は、また別の事故現場へ行くらしくパトカーに乗り込んで行ってしまった。

保険で直すとしても免責（自己支払い分）で4万くらいはいくかなあ、などと現金な心配をしつつ、私は忌まわしい事故現場をあとにした。

若い巡査の言われるとおりに、千里インターへ出て、江坂から東へ向かった。吹田署。入って二階に上がると、交通事故課という部屋があった。今日まで、被害者とはいえ、免許書き換え以外でよもや警察のお世話になるとは思ってもいなかった。う～ん、緊張してしまう。ここで、先ほどのパトカーのお巡りさんたちに喋ったことを復唱する。調書のようなものを取ってから、担当のおっさん警察官は言った。「う～ん、この事故現場は茨木署の管轄やねえ。お忙しいでしょうけど、茨木署のほうへこの紙持って行っていただけますか。」

事故現場は、地図を見ると、茨木市と吹田市の境界部分で、確かに茨木市のほうに入っていた。こりゃあ！パトカーの二人、君ら間違ったこと言ってくれ

ちゃ困るよ、あそこから茨木署だったら、すぐだったじゃないか。ぷんぷん！

吹田署と事故現場と茨木署は南北に一直線にならんでいたの、傷ついたエス君は、こんどは進路を北に取り、茨木署へと向かった。運転しながらも、目がどうしても、他車のナンバーへ行ってしまう。こんな風に走っている状態で、偶然見つかるわけではないのだし、他への注意がおろそかになるので、やめた方がいいとは思いつつも、見てしまうものだ。

茨木署の駐車場は、事故車の巣窟みたいになっていた。ドライバーズシートのあたりまで押しつぶされた車や、ちょっと黒い筋が入っただけのおばちゃんKカーまで、様々。エス君は軽傷の方だが、やはり傷跡を見るたびに胸が痛む。

茨木署は1階に交通事故課があった。担当は30代の市役所所員みたいな、あまりやる気の無さそうなおっさんだった。それでも、私が、ローンもいっぱい残ってるんです、犯人見つけてください、うるうるうるると涙声（にはならなかったが）で言うと、さすがにぶつけ車の特徴を詳しく聞いて、「捜してみましよう。」と言い、「これに間違いはない、と決まったらお知らせします。」と言った。

しかし、「これに間違いはない、と決まったら」という意味は、同じ車種の同じ色の同じナンバーの車が2台いたら、知らせないよお、という意味である、ということと言外のそこここに匂わせていた。確かに、そのどちらかが犯人であったとしても、少なくとももう1台は無関係の車ということになる。警察としては無関係のドライバーに迷惑（例えば出頭してもらったり事情を聞いた）はかけられないということだろう。

あまり、警察には期待はできない。かくなる上は自分で、あの場所に張り込んででも、調べるしかない。そう思った。もしぶつけ車があの時間、偶然あの場所を通りかかっただけなら、見つかる可能性はまあ0だろうけど、もし、勤めなりバイトなり通学なりで習慣的にあの道を走っているなら、可能性は多いにあるのだ。と言うのも、千里方面から東大阪方面に抜ける道は、中環しかないといえるからだ。

茨木署で事故写真を取って、簡単な調査を終えると、時刻は11時を回っていた。今日の授業は昼までだったので、今から学校へ行っても無駄だろう、とは思いつつ、門真にも行かねばならなかったの、中環を東へ向かった。「本来なら3時間前にとおっているはずだった道のりであった。」

走っている最中は結構気が紛れたりするのだが、このようにフト思い出したりして、また胸がいたむ。

さきに門真の試験場へ行って、事故証明書を申し込んできた。なんと600円もとられた。しかも10月からは700円になるという。9月22日だったので、すべりこみセーフ！などとセコク喜んでしまったが、事故修理免責代一数万円ということ思い出してしまって、かえって落ち込んでしまった。

「わぁ、先生どないしたん、今日の授業？」

昼休みの時間になっている学校にやって来ると、生徒の何人もが声を掛けてきた。普段はつまらなそうに授業を聞いている子でも、突然自習になったりすると、気になるのだろうか。それともよほど私が落胆している様子があったのか（普段と同じにしていつもりだったが・・・）。教頭と事務と理科の先生方に報告をして、昼休みが終わるころには、家に向かっていた。

家に帰って、保険証を捜したがなかなか出てこない。古い保険証やらコロナの方の保険証やいらんものはなんぼでも出て来るのに、エス君の保険証がない。しかたがないので保険会社に直接電話をして、その旨伝えると、住所やら免許証番号とかを確認した上で、話を聞いてくれた。まぁ、向こうの言うことは「事故うちゅうのは分かった、保険金も出したるから、近くの工場へ車を入れなはれ。」ということだった。

スズキ自動車箕面へ、車を持って行くことにした。エス君を置いて行くと、帰る手段がなくなるので、妹を無理やりコロナに乗せ、ついてこさせた。妹は免許を取ってしばらくで、自分の家の車に自分の家の車をぶつけるという失態をしでかしてから、車にはいっさい乗っていないのだ。これで追突でもされたら、わしはもう帰ってフテ寝でもしよう、などと考えていたが、何事もなく無事に到着した。2月ほど前はエス君購入のため足しげく通ったこの店に、修理を頼みに来ることになるうとは。ううう、恥ずかしいよう。「明日は祭日で、明後日は土曜で、明明後日は日曜なので、修理にとりかかれるのは4日後の月曜からになります。」と工場ににいちゃんはすまなさそうに言った。私はそれやったら出直してこようかとも思ったが、妹に再びコロナを運転させるのも恐いし、保険会社が工場の方へ、事故写真を取ったり調査にきたりするという事も聞いていたので、預けることにした。

家に帰って、3時過ぎだったか、ようやく昼飯を食った。そしてすべき事はとりあえずしてしまったので、前日レンタル店で借りてきたCDを聴いた。普段聴いているようなものよりは、多少明るい感じのものだったので、少し気が紛れた。

その日は家の者が出払ってしまって、夕飯はひとりで食うことになっていた。飯はあるが、おかずの類を、材料から買いはじめるというような、気合いも器量もないので、千里に食事に出かけた。「とんかつの梅八」でロースカツ定食 800 円ご飯大盛りを食べて、いっぷくつくと、大分落ち着いてきている自分に気づく。ハリコミを何週間か続けて、自分から諦めるころには、悔しさも忘れるだろう、と思った。

なんとなくコーヒーが飲みたくなって、「珈琲専門店アストリア」でコーヒーをのんだ。閉店まぎわだったので、客は一人だけで、入口を背にして座っていた。従業員は雑談をしていた。私はあいている席に、もうひとりの客と向かい合うようにして座った。その客は30前くらいのニーチャンで熱心に一心不乱に「少年マガジン」を読んでいた。だめおやじ（マガジンだったね？）の頃からのファンなんだあ、俺は！という感じであった。しばらくそのニーチャンを眺めていたが、この人も悔しさとか不信感といった経験の一つや二つはあるんだらうな、とフト思った。そう思うと、店の前を通る会社がえりのオジサン達を眺めてみると、もっともっと苦悩に満ちた過去をもっていそうで、なぜかみんながみんなそれをひた隠しにして黙々と働いているのだ！と想像され、何故か尊敬のまなざしを向けてしまうのだった。

夜、布団に入ってまたフト考えた。あいつはどんなふうはこの夜を迎えているのか。馬鹿な奴がいてよ、などと私の悪口を言いながら仲間と酒でも飲んでいるのか、罪悪感に脅えながら布団に潜っているか、どっちでも、まあ関係ないけど・・・、後者であって欲しいな、まだまだ甘い俺も。